

寛仁元	5	1016				2・7 現在則光は散位（天祚礼祀職掌録）
	1017		（前大和守）	8・21 勸学院、内大臣摂政補任の賀に参加（権） 10・13 摂政頼通の使をつとむ（左） 12・1 御元服の弁官方の所行について頼通の使をつとむ（左）		3・4 頼通摂政となる（紀） 5・12 三条天皇葬送（関） 12・4 道長任太政大臣大饗を三条第で行う（関・小）
2	1018		（前大和守）	1・23 摂政大饗料屏風歌撰入さる （関・左・小・栄花物語ゆふしで） 家集47・48		
3	1019			このころ則光と贈答か 家集46	7・25	このころ則光奥陸守（小）
4	1020		木工頭 （従四位下）	8・18 関白頼通の使として鹿嶋香取両社奉幣封戸を寄せることにつきて実資のところに参上す。木工頭輔井とあり。（小）		
治安元	1021		没力（作者部類）			

(注) (紀) 日本紀略 (関) 御堂関白記 (小) 小右記 (権) 権記 (公) 公卿補任
(世) 本朝世紀 (左) 左経記
▲印をつけた詩会は輔井の出席の可能性のあるものとして便更上記した。

4	2	長和元	(三条) 8	7
1015	1013	1012	1011	1010
(五位)	(散位カ)			
<p>5・5 一品宮の忌にこもる。家集66・67・2</p> <p>12・4 敦良親王読書始。五位文人として招かる。作文あり(小)</p>	<p>4・15 このころ大和守を退くか。</p> <p>このころ能因と贈答(能因法師集)</p>	<p>9・21 大和国百姓、旱損により守輔尹の任期を延引することを申出るも許されず(関)</p> <p>12・4 当子齋宮卜定。輔尹宅に坐す(紀)</p>	<p>2・15 頼通春日社参詣。侍臣地下「国司輔尹、仰悉従う「為不饗応深結忿怨」天抱膝無方供給」と愁嘆(小)</p> <p>6・13 三条院受禪の儀に奉仕(権)</p> <p>6・25 一条院葬送ノ饗に奉仕(権)</p> <p>8・2 一条院法事 時剋槌鐘に奉仕(権)</p> <p>8・11 藏人所饗の備え取火舎の事に奉仕(権)</p>	<p>3・20 栄山寺領田畠を勘注す(栄山寺文書)</p>
<p>4・26 一品宮資子没す(小・関)</p>	<p>4・15 左馬権頭藤原保昌兼大和守(小(一六日))</p>	<p>7・16 匡衡没す(小)</p>	<p>6・13 一条院御讓位(紀)</p> <p>三条院受禪(紀)</p>	<p>1・28 尹周没す(紀・公・権)</p> <p>3・30 匡衡丹波守に任ず(関)</p> <p>7・24 以言没す(紀)</p>

6	5	4	3
1009	1008	1007	1006
大和守			左少弁
<p>3・2 源頼親退任により大和をのぞむ申文を奉る（権）</p> <p>3・4 任大和守（権裏書）</p> <p>7・4 国解・日記を進む（関）</p> <p>7・23 東宮殿上人に定めらる（関）</p> <p>10・20 栄山寺別当阿闍梨康野らの申請に依り同寺領管省符田畠一丁四段の内九段百二十歩の租税を免除す（栄山寺文書）</p> <p>12・28 栄山寺の申請に依り輔尹をして不輪租田と為さしむ（同）</p>	<p>1・4 四位に叙す可くも任すべき官なきにより暫く叙さず（権）</p> <p>1・25 左大臣家大饗に参加（権・関・紀）</p>	<p>1・5 家集6と関連か。（斉信家焼亡）</p> <p>▲3・3 上東門第曲水宴「因流泛酒」</p> <p>4・25、26 内裏密宴。文人らを召す。文人として参加（関）所貴是賢才（紀）</p> <p>9・9 重陽宴に参加「菊花映宮殿」（九月九日記）</p>	<p>2・7 奉山城辞書（権）</p> <p>▲3・4 東三条第花宴「度水落花舞」（関・権）</p> <p>4・1 平野祭。例により行う由仰を受く（権）</p> <p>▲3・27 内裏作文「春酒延齡」（権）</p>
<p>1・(28) 匡衡、中清に代り尾張守に任ず（類聚符宣抄）</p> <p>3・4 左少弁に為時任ぜらる（権）</p> <p>7・28 中書王具平親王没す（紀・関・権）</p> <p>9・19 大式高遠訴えられ厘務停止（関）</p>	<p>2・27 尾張守中清、郡司百姓から罷免要求さる（関）</p>	<p>1・5 右衛門督斉信家焼亡。北方輔尹宅へ逃る（権）</p>	<p>12・10 山城国、大和守……等申請雑事を定む（権）</p>

寛弘元	2
1004	1005
左少弁	左少弁 八月以降 兼山城守 (少弁兼受領 例、始自輔尹 (官職抄抄))
<p>4・10 宇佐神人勘問のため松本曹司下向(紀・関)</p> <p>6・17 左少弁致書辞し、輔尹左少弁任。後任広業。</p> <p>9・9 目録賜。清涼殿に於て作文(関)</p> <p>▲関9・9 庚申詩宴(紀)「菊為九日花」(関)</p> <p>9・12 左府で作文。「水清似清漢」(関・権)</p> <p>「和漢兼作集」に入る。 10・9 維摩</p> <p>会奉仕(関)</p> <p>10・21 平野行幸相從(権)</p> <p>11・19 女王祿奉仕(権)</p> <p>12・13 伊賀守為義減省申文の件に応う(権)</p>	<p>▲3・3 御書所作文「花貌年々同」(紀)</p> <p>3・29 左府作文。花落春帰路(関・小・権)</p> <p>「本朝麗藻」に入る。</p> <p>6・30 東宮殿上被聴(関) 家集13</p> <p>7・17 相撲装束のことで参内(小)</p> <p>▲9・3 道長直盧作文(殿上人参加)「菊蓼花未開」(関)</p> <p>▲9・9 重陽清涼殿作文</p> <p>「菊是花聖賢」(関・小・権)</p> <p>▲9・15 道長第庚申作文</p> <p>上達部・殿上人会合「池水浮名月」(関)</p> <p>10・1 番奏、供御贄下器等のことに奉仕す(小)</p> <p>10・19 匡衡の木幡願文に意見を加う(水源抄)</p> <p>8月以降 兼山城守 家集28・29</p>
<p>2・26 摂津守説孝、住吉神人に訴えらる(関)</p> <p>3・24 宇佐八幡宮神人ら平惟仲を訴う(紀・関・権)</p> <p>4・28 右衛門権佐孝忠ら推問使と決る(権)</p> <p>7・1 推問使孝忠病と称し下向せず(小)</p> <p>8・22 推問使下向(関)</p> <p>10・6 推問使上洛(権)</p> <p>12・28 平惟仲大宰権帥停任。</p> <p>藤原高遠を任ず(紀)</p>	<p>2・29 尾張守中清赴任(小26日条)</p> <p>2・29 大宰式藤原高遠門出の儀(小)</p> <p>3・14 平惟仲薨(紀)</p> <p>7・29 孝忠はまだ山城守在任中。</p> <p>(防鴨河使衛門権佐兼大介 藤原朝臣)</p> <p>10・19 匡衡木幡願文(本朝文粹十三)</p> <p>11・13 敦康親王読書始(小)</p>

5	4	3	2	長保元	
1003	1002	1001	1000	999	
		右少弁 (五位)			
<p>5・10 15 左府大饗に奉仕(権)</p> <p>5・15 左大臣道長歌合に参加。家集49 57</p>	<p>3・7 季御読経結願に着座(権)</p> <p>5・16 左府御読経始に参会(権) 8・17</p> <p>10・3 建礼門院前大板に奉仕(世)</p> <p>11・22 園韓神祭、上卿に代り奉仕(世)</p> <p>11・26 東宮鎮魂、上卿に代り奉仕(世)</p>	<p>10・8 御賀屏風四帖和歌十二首。輔尹一首(権)</p> <p>10・1 着座 10・7 東三条院四十賀試楽。屏風和歌を奉る(権) 家集39 40 41 42 43 44 56 59</p> <p>8・23 除目に於て任右少弁(権)</p> <p>7・13 小除目で権右少弁任か。7・21 権</p> <p>右少弁初参(権)</p> <p>『采花物語』「とりべの」にあり。</p>	<p>10・24 淡路守扶範百姓愁訴により停止。(関)</p> <p>12・7 右衛門権佐孝忠任山城守</p> <p>10・9 東三条院四十御賀</p>		<p>保元年勘定其後同。三、兩年未勘(権・寛弘元年十二月十二日条による)</p>

4	3	2	長徳元	5	4	3	2
998	997	996	995	994	993	992	991
伊賀守					藏人式部丞 (六位) (道兼家司)		藏人 (六位)
伊賀守為義申減省申文(中略)……当。 任長保四五并二年申請続文、前司輔尹。 申長徳四年長保元二三、而税寮勘文、長					2・28 侍所に主上出御。殿上賭弓の定め、射手を 前後に分けらる。輔尹執筆書分く。(権) 3・29 殿上賭弓に参加。前方の組にあり(権・小) 4・8 御灌仏に奉仕(権) 10・26 道兼の右大將上表の使をつとむ(権)	1・19 「円融太上法王葬送日、為藏人見諒聞 儀云々」(「権記」寛弘八年十一月十一日 条による)	1・19 「円融院葬送(紀)
		1・25 挙直 任参河守(長徳二年 大間書) 輔親任三作介従五位下 為時任淡路守。28日任越前守					

藤原輔尹略年譜

年号	西暦	官職	事蹟・その他	備考
天元元 ～ 永観元 (花山) 2	978	984	大学助 (正六位下相当)	8・27 花山天皇受禪 10・10 即位
寛和元	985			10・17 挙直 任藏人大学少丞 <small>所雑色</small> (小)
(一条) 2	986			6・10 挙直 藏人木工助(世) 10・26 輔親文章生試 11・7 輔親文章生試及第(公)(33才)
永延元	987			1・8 挙直 任藏人 <small>山</small> 主殿助 <small>華</small> 藏人 <small>御時</small> (小)
2	988			11・8 尾張国郡司百姓守元命を訴う(平安遺文)
永祚元	989			
正暦元	990			

⑫ 川口久雄『平安朝日本漢文学史の研究』(中)六〇〇頁。後藤昭雄『平安朝漢文学論考』所収「一条朝詩壇と『本朝麗藻』」。

⑬ 「奉輔尹朝臣奉山城辞書。命付奏者。」(『権記』寛弘三年二月七日条)

⑭ 「歌人藤原輔尹」(和歌文学研究 27号 昭和四十六年七月)

⑮ 「藤原輔尹」(国文学研究 四十集、昭和四十四年六月)

⑯ 「日本紀略」『御堂関白記』『百練鈔』寛弘元年三月廿四日条参照。

⑰ 詞花集雜上三〇三に「山城守になりてなげき侍りける頃月のあかりける夜まうで来りける人の、いかと思ふと問ひ侍りければよめる」として入集。

⑱ 『平安貴族の世界』(徳間書店)三三三頁。

⑲ 「藤原輔尹」(国文学研究 四十集 昭和四十四年六月)

⑳ 「源巖子地林相博券文」は、「長和二年六月廿二日」で、「守」の署名は無い。「長和二年九月十日」付は「大和国栄山寺牒」(四七一)の日付である。

また「大和国栄山寺牒」の「寛仁元年九月二十五日」の署名は「輔尹」でなく、「右馬頭兼守藤原朝臣「輔公」」である。

㉑ 『御堂関白記』長和二年四月十五日条によれば、信経・保昌の京官の任官については、「是依可供奉祭也」とある。『小右記』の「兼大和守」も同時に任ぜられたものか、その程のことは明確にはわからない。三月が満四年の秩満の時期に当たっているはずであるから、四月十五日以前に交替した可能性も当然考えられよう。

㉒ 『小右記』寛仁二年正月二十一日条「和歌者(尊)齋主（尊）輔親・前大和守（尊）輔尹・左馬頭保昌妻式部読之」㉓については他に『御堂関白記』『左経記』『栄花物語』『ゆふしで』参照。

㉔ 家集 8 9 10 11 12 28 29 (47 48 頼通大饗) 49 58 番、また大井で詠んだ歌、その他の屏風歌なども道長との関係が深いのではないかと思われるし、長保五年五月十五日の道長歌合への参加、後集集に一首・万代集にみえる四首も道長関係の屏風歌である。

詩文訓読について岡本不二明氏に種々御教示を得た。記して御礼申し上げます。

正誤表

頁・行	誤	正
<div> <div> <p>上 10</p> <p>右衛門権守→右衛門権佐</p> </div> <div> <p>上 24</p> <p>工・木頭→木工頭</p> </div> </div>	<div> <p>下 ⑦</p> <p>『古本系江談抄注釈』→『古本系江談抄注解』</p> </div> <div> <p>⑧</p> <p>学門→学問</p> </div> <div> <p>⑨</p> <p>『菅家文章』→『菅家文章』</p> <p>『続本朝文粹』→『本朝統文粹』</p> <p>『古本系江談抄注釈』→『古本系江談抄注解』</p> <p>水源抄→水言抄</p> <p>水源抄→水言抄</p> <p>厘務→釐務</p> <p>奥陸守→陸奥守</p> </div>	

四

詩人としての輔尹、その評価並びに官人として受領としての輔尹を現存資料を通して垣間見、その経歴、伝紀にかかわる二、三の問題点について考察してきたが、文章道を経て、主として正暦・長保・寛弘期の一条朝盛期を京官として過ごし、道兼・道長から頼通の時代へと撰関家とは私的にもかなり近親の関係を保って仕えた輔尹の生涯は、撰関体勢下における諸大夫家司層の、いわゆる和漢兼作の人として当代の官廷文化を支えた典型的な存在であったといえよう。

記録類に見える限りにおいて、弁官時代の真面目な活躍ぶり、また国司として得た農民からの支持などを併せ考えれば、相応に有能な官吏でもあった様子がうかがえる。私的には道兼の家人として仕え、和歌詩文を通して道長とのかかわりも深く、老いては頼通に近く仕え、その間にあつて作詩(残る作品は少いが)、作歌活動の足跡も又相応に残したことを認めてよからう。

数少い詩文に比し和歌は家集を持ち家集外の現存歌と合せて約八十首を見ることが出来る。後拾遺・詞花・新古今に入り、後十五番歌合・玄々集・和漢兼作集・新撰朗詠集・後葉和歌集・万代集に入り、道長歌合に参加、東三条院四十賀屏風歌・頼通大饗屏風歌また道長家(法成寺入道前撰政家)屏風歌等を残した足跡は歌人としても遜色は無い。しかし職業歌人では決してない。文章道出身の輔尹の本領はやはり詩文にあったと言つて過言ではなからう。

最後にその生没について、これも不明であるが寛弘九年(長和元年)七月十六日、六十一才で没した匡衡よりやや年少で、輔親とほぼ同年代と考へても、工木頭輔尹と『小右記』に記される寛仁四年(1020)には、すでに七十才近い年令に達していたと推定される。その没年につ

いて『勅撰作者部類』には「至寛仁五年」と記されているが、その拠つて来たるところは定かではない。

(注)

- ① 「藤原輔尹」(国文学研究 四十集 昭和四十四年六月)。「歌人藤原輔尹」(和歌文学研究 二七号 昭和四十六年七月)。
- ② 輔尹は左少弁までで権右中弁には任じていない。あるいは長く権右中弁の席にいた重尹の経歴がまぎれ入ったか。
- ③ 「興学」は「興方」の誤りらしい。
- ④ 陽明文庫本では詞書に「さいす、けちか、あたらしきいへにす、みするに、つまとにあれたるまつを、心あるさまにゐいす」とあり、下句「ときはまつぞまどにあたれる」とある。
- ⑤ 「公卿補任」長元七年 大中臣輔親尻付。
- ⑥ 冒頭歌と共に家集14番「九月つきのおもしろきを つねよりものどかに見ゆるながつきのきみがみよとものたのまるる哉」もこのころの作かと思われる。両首ともに新しい御代を頼む心が切実によりこまれている。
- ⑦ 「古本系江談抄注釈」(江談抄研究会編 武蔵野書院)一五九頁参照。「源氏物語」の夕霧の師となる右大弁や「窮りたる大学の衆」(少女)の如く、当代のすぐれた学者層が、貧に甘んじていたことを皮肉つたものであろう。
- ⑧ 「孔門」を「儒学」「儒門」「大学・文学・学門」の意として用いた例は、「交遊長乖三于孔門之中」「(請)被下殊蒙二天恩一依二殿上旧勞一拜中任諸司助闕上状」(紀齊名)、「知三孔門之有此風。」(「晚冬過二文郎中一翫二庭前早梅」)「管贈大相国」など『本朝文粹』の例であるが、『菅家文章』『続本朝文粹』等にもみえる。こゝもその例。
- ⑨ 「古本系江談抄注釈」には、この話について「類従本江談抄に見つからない珍しい一項。このことは従来の「江談抄」の研究者に余り注意されていない様子。水源抄のような原本から類従本江談抄のような本が編集される際に見落されたのであろうか」と注される。
- ⑩ 廿六日甲戌 前大宰権帥藤原朝臣伊周蒙二宣旨一之後初出仕也。(『日本紀略』)
- ⑪ 『小右記』寛弘二年四月一日、二日条。

等々。それらを目のあたりに見てきた輔尹であつた。そしてまた前述『江談抄』に言うごとく人品高潔の故に貧に甘んじた輔尹である。匡衡もまた尾張の守として善政を鋪いたことは知られる通りであるが、こうした意味からすれば輔尹もまた百姓たちのよき理解者、指導者としての一面を備えた良吏に属したのかも知れぬ。

さて大和守を辞したのは何時か。水野氏は前掲論文の中で「長和元年か遅くとも翌二月の春までには大和守を退いていた」とされながらも『平安遺文』の「源巖子地林相博券文」（長和二年九月十日）「並びに『大和国栄山寺牒』（寛仁元年九月二十五日）」の署名から「長和元年の後も更に五年間、大和の守の官にあつた」と疑問を出されたが、やはり「長和元年で退いたと考えておくのが妥当」とされた。『平安遺文』の件については少々混乱^⑧がおりのあるようであるが、この交替期については『小右記』長和二年四月十六日条に記されているのが参考になるのであげておきたい。

十六日^{丁丑}大外記敦頼朝臣注送、昨日直物欵。小除目。内蔵権頭藤原信経、左馬権頭藤原保昌^{兼大和守}、山城権介大江有道、大外記敦頼朝臣云、直物了。卿相退出。及遅明。

即ちこの頃、輔尹の後任として左馬権守に任じた保昌が兼任することとなった様子が窺える。従つて「大和国栄山寺牒」長和二年九月十日（平安遺文四七一）、同十一月五日（同四七四）、及び「大和弘福寺牒案」長和二年十一月九日（同四七三）の署名「左馬頭兼守藤原朝臣」は「保昌」である。長和二年四月ころ以降、輔尹は大和前司として散位であつたろうことは前にもふれた通りである。

次に「木工頭」の任官期と付随する問題について述べたいと思う。
寛仁四年八月十八日『小右記』に

（略）関白使木工頭輔尹被命云、任大臣後可奉朝服・笏・封等鹿

藤原輔尹考（福井）

鳴香取云々、或云可奉装束者、尋入道殿例、無一枚文書、忽無知其事之者、至被入勸学院、施薬院等之例文等各在後院^{（後カ）}、唯鹿嶋等例未能尋得許也、有故小野宮例文欵、可写送者（以下略）

とあつて「木工頭」として頼通の使で実資を訪れている。木工頭となつた時期は不明であるが、二年前の寛仁二年正月廿一日、二十三日に行れる摂政家大饗のための屏風歌が択定された時には「前大和守」であつたから、その後の任官であろう。また長和四年十二月四日敦良親王の読書始に列席した時には「五位」であつたことは前述したが、尊卑分脈による限り「従四位下」と記されている。或は木工頭と相まつて加階したものであろうか。

なお『左経記』によれば、寛仁元年十月十三日、関白頼通の使として輔尹が石清水神宝使、その他の件を伝えに経頼のもとを訪れており、また同年十二月一日には

入夜大和前司輔尹、蒙摂政殿仰示送云、御元服之間并官方有所行之事、其行事可勤仕也者、令申奉畢由（『左経記』）

とあつて、来年早々に行れる後一条天皇（十一才）の御元服の儀に関して、弁方の行事勤仕の旨を藏人左少弁経頼に政摂頼通の使として伝えてゐる。

前述木工頭としての実資への使の内容の可成重要な役目を帯びていることや、『左経記』の二例など併せ考える時、あるいは前大和守として散位時代から政摂頼通の家司として仕えた可能性が考えられなくもない。

寛仁二年正月二十三日、頼通の「摂政大饗」の屏風歌を詠進し、輔親・和泉式部と共に撰入されているのもこの間のことである。

おほせられしに

28 山しろのいはたのりのいはずともおもふ心をてらせ月かけ^①

輔尹にとって、恐らくは孝忠の場合と同様山城守兼任は思いがけなく給った任務ではなかったろうか。『官職秘抄』に見える「少弁兼受領例始^レ自^二輔尹^一」が、この兼任に由来するものであることは水野氏の言われる通りである。

辞任の理由については必ずしも定かではないが、前述行成に訴えた孝忠のことばの中の「当国難治亡弊之第一也。拝除之日、只歎不運之甚」と決して無縁ではなからう。山城の「難治亡弊」の事情を抱えて引継ぐことへの憂いと共に水野氏の述べられるように京官との兼任を十分果すことのできないことの憂慮があったものと考ええる。しかし、ここに一つ疑問を感じるのは、二月に奉った申文がそのまま受理されたか否かについて記録類では必ずしも明らかでないことである。というのは、同年十二月十日に行れた諸国申請の雑事の定めを行ったことについて『権記』には、

又山城国司、大和守頼親、長門守良通、志摩守恒政等申請雑事、同定申

（寛弘三年十二月十日条）

と記され、国司らの申請雑事について道長は「諸国申文三枚」（関白記）と記しており、「山城国司」のことは今回新しく申請された申文三枚とは別問題らしく思われるふしがあるからである。因みに『大日本史料』では「山城国司」に「（孝忠）」と注を付しているが再任の史実は明かではなく、誤りであろう。行成の記すこの「山城国司」は、勿論推定の域を出るものではないが、兼任後僅かに二、三ヶ月で輔尹の二月七日に奉った「山城辞書」がすっかりとは受け入れられなかったことを暗示してはいしまいか。とすれば、家集に前述二十八番歌に続いて

秋ごろおなじ所にておなじ心を

29 やまのはにやへたつ雲のたえざらばみるべきものをやまのはの月と重ねて詠んでいるのも、更にこの暗示を強めるものではないかと考えられるのである。

左少弁として寛弘六年三月まで勤めた輔尹は、大和守頼親の辞任に伴い任官の申文を三月二日に奉った。そして同四日、対立候補兼忠がいたが輔尹の選ばれるところとなった^{（記権）}。七月四日国解、日記を進上^{（関白記）}し、同二十三日には東宮へ後の三条院の殿上人に定められた^{（関白記）}が、間もなく下向したものと思われる。十月には早くも榮山寺申請による租税免除にかゝる事務を手掛けている（榮山寺文書）。任期中の寛弘八年には一条院の讓位・崩御、三条院受禪、一条院葬送・法事等々、都での役割も多く、多忙であった様子がうかがえる。そして長和元年、秩満の期も近くなった九月廿一日、早損の理由から大和国の百姓たちによって国守輔尹の延任が申請された。『御堂関白記』長和元年九月廿一日条には

又大和国百姓等申、依早損、被延守輔尹任者。定申云。依早損、不可為延任者。

とあり、結果的には延任は許されなかったのであるが。少くとも百姓たちからの信任を得ていたことが窺える。村井康彦氏は「おそらく早損ということ、官物を大巾に減免したのであろう」——そうした意味の「迎合型良吏」^②の一人と述べられる。確かにそれも否定できないであろう。

しかし、輔尹の京官在任中、ともかくも相次ぐ百姓からのまた神人から訴えられる国司の事例があった。その主なものを挙げても寛弘元年二月には摂津守説孝が住吉神人に訴えられ、同三月には例の惟仲の事件、そして五月二日には尾張の国郡司・百姓に守中清が訴えられる

寛弘元年六月十六日左少弁に遷った輔尹であつたが、その任官期の定かでないまま、寛弘三年二月七日、『権記』により、山城辞書を奉った旨を知る。山城守兼任の時期について水野氏は、「恐らく寛弘一、二年に右少弁または左少弁と山城守を兼任することになったものと思われる」こと、また辞任の理由について「畿内中の上国山城の守に不満を漏らさねばならない特殊な事情があつたかもしれないが、一般的に考えて、京官に対する執着のためであろうか」と思われることを述べられた。この問題については明確なことはわからないが、可能性としてのこころみを以下に述べたい。

輔尹の拝任前の山城守は、藤原孝忠であつた。孝忠は右衛門権守との兼任で、長保三年十二月七日勅定により任ぜられた。記録には左のごとくある。

七日(略) 有除目。頭中將於膝突仰左大臣、山城国可任人可定申。被申云。参入上達部外幾、重隨仰可左右。重有勅答、申左中弁説孝朝臣。右衛門権佐孝忠・大膳大夫為儀、勅定孝忠兼。仍左大弁秉筆書之(以下略) (『権記』)

其後三年を経た寛弘元年三月廿四日、宇佐八幡宮の神人らが陽明門に参入して、大宰権帥平惟仲を訴える事件が起つた。廿七日陣定を行い神人らの愁訴のことが議され(御堂関白記・小右記・権記・百練抄)、四月十日には、輔尹は神人らを停めている松本曹司に下向、怠状を進めしめてゐる(日本紀略・御堂関白記)。またさらに廿八日には事件調査のための推問使として孝忠らを大宰府に遣ふことが議せられ決定した(日本紀略・権記・御堂関白記)。推問使に選ばれ困惑した孝忠は、行成を訪れ次の如く愁えている。『権記』長保六年(寛弘元年)四月卅日条によりその間の事情を窺おう。

推問使孝忠朝臣来、示雜事之次云。当国難治亡弊之第一也。拜除之日、只歎不運之甚。今及秩滿之年、雖承当使者之選、亦思依有

任国事。不可被遣之由、頗為悦之間、已奉使、雖申辞遁、不可有許容。仍令勅使節之处、任国事六七月間、欲沙汰了、若向遠所徒送日月、忝任国事、又初拜年十二月也。可申計歴、若依公文事等、欲申延任、然而如此難治事不終四年有辞退之輩、未有延一兩年、迷其停事之者、早蒙左府之御定可左右者。(以下略)

と。秩滿の年をひかえ、傍点部に推察されるような複雑な国情を抱えた任国の、その沙汰を六七月中に終えねばならぬのに推問使に選ばれ、そのために起りうる事務上の渋滞に対する悩みを吐露している様である。孝忠はその後申文を出したりしていたが『小右記』に

(七月一日条) 允亮朝臣談法家□□次云、推問使孝忠朝臣稱湯病不可下向、雖被處重料不可使節、是依不被理申請事云々

とあるように病と称して下らず結局その間(六七月)に任国の沙汰を終えてか、八月二十二日に至つてようやく下向した。そして任を終えて十月六日には大宰典代永峰忠義を伴い帰洛、十二月には惟仲退任に漕ぎつけている。事件はともかくとしてこの孝忠の山代守の任期は寛弘二年十二月で満四年間の期を終えることになるはずであるがその交替が何時であつたかはわからない。ただ『平安遺文』四四〇、寛弘二年七月廿九日付の「散位藤原為賢公驗紛失状」の署名に「防鴨河原使右衛門権佐兼大介藤原朝臣」とあるのによれば、七月末現在の在任は確実である。この年の八月以降の京官除目は八月十三日及び十二月二十七日に行われているがいずれも記述が細かくなく山城の事にはふれられていない。しかし翌寛弘三年二月七日には前述のように輔尹は山城辞書を奉つてゐるのであるから、孝忠と輔尹の山城守交替は、早くとも寛弘二年八月以降、十二月の間となろう。

山城拝任当初の詠とみられる歌が家集二十八番にある。道長第での作である。

山しろになりてよの中すさまじきに大殿にて月まつ心よめと

幸いである。

△寛弘元年九月九日 清涼殿作文「菊為九日花」 (節会の弁官として奉仕の後の開催)

○同九月十二日 道長第作文「水清似清漢」(『和漢兼作集』所収)

△寛弘二年三月三日 御書所作文「花貌年々同」

○同三月二十九日 道長第作文「花落春帰路」(『本朝麗藻』所収)

△同九月三日 道長直盧作文(殿上人来作文)「菊叢花未開」

△同九月九日 重陽 清涼殿作文「菊是花聖賢」

△同九月十五日 道長第庚申作文(上達部七八人許、殿上人会合)

「池水泛明月」

○同十月十五日 「水言抄」木幡願文の逸話。

△寛弘三年三月四日 東三条第花宴「度水落花舞」(内蔵権頭為義率殿上五位)

△同三月廿七日 内裏作文「春酒延齡物」

△寛弘四年三月三日 上東門第曲水宴「因流泛酒」

○同四月二十五日・二十六日 内裏密宴。文人として出席。(『関白記』二十六日条によれば、為憲・孝道・善言・弘道・以言・拳直・輔尹・為時・敦信・通直・宣義・積善・時棟・忠真・頼国・義忠・章信らが召されている。)

同日『日本紀略』には次のように記す。「二十五日辛卯、於一条院皇居命詩宴。題云所貴是賢才、公卿以下属文之輩多献詩。題者権中納言忠輔卿。序者文章博士大江以言。講師東宮学士大江匡衡。又有音楽。」

○同九月九日 重陽宴 「九月九日記」によれば「皇帝出御南殿、左右近衛陣南階東西如常」として右大臣以下の面々の中に「左少弁輔尹」の名がある。「菊花映宮殿」。匡衡序。

等々。○印は確実な参加を、△印は可能性の大なることを示した。

また、法華八講に伴う歌合ながら、専門歌人に文人を交じえて催された長保五年五月十五日の道長歌合の歌人として撰ばれていることも、歌に堪能なものと言うに増して詩文の人としての面目を見るべき事実と思われる。

輔尹の作詩活動をめぐって記録類から、そのあらましを知るべく、推定を交えて読みとってみたが、これらによっても京官としての在任中は、相応の作詩活動のあったであろうことが推察される。なお寛弘六年三月四日大和守拝任の後、詩文にかかわって記録の中にその名をあらわすのは、長和四年十二月四日、敦良親王読書始の儀に、五位文人筆頭として著座するまで待たねばならない。当日の記録には、

十二月四日庚辰、敦良親王読書始、侍読博士広業、尚復定親

相府以右中将朝任宮家召文人為政以上四位輔尹敦信善周章信義

令著座、(略) 大江通直献詩題、善滋為政献序、題 聴先朝第三

皇子読御注孝経 (『小右記』)

とある。後述するように輔尹は大和守を二年前の長和二年四月十五日ころには、すでに保昌と交替しており、この日の参加は、前大和守散位で、五位の文人としての参加と察せられる。長和二三四年の間には、能因との贈答(能因集)及び一品宮薨去後の詠歌(長和四年五月五日、家集667)などを見るばかりで記録類にその名を見ることのできないのも、その官の散位であったことを暗示するものであろう。

三

次に官人としての輔尹の足跡の中で、その経歴にかかわって、山城の守兼任・辞任の時期、推定される辞任の理由また前項で少しふれたが大和守の交替期について、木工頭拝任期の推定等、水野氏の前掲論文に疑問を残しておられる点を含めてやや詳しく考察したいと思う。

積善撰するところの『本朝麗藻』(上)、並びに(下)の「酒部」に各一首入集のものである。前者は寛弘二年三月二十九日、道長第弓場殿に於ける作文会での作である。例によって『御堂関白記』及び『小右記』によって当日の様子をうかがえば、

二十九日丁丑 水成 巳時許帥来。於弓場殿射弓。従未時作文。
題花落春帰路。

(『御堂関白記』)

二十九日丁丑 於左府有作文。属文卿相以下文人多会云々

(『小右記』)

と伝えている。前帥伊周以下多くの属文の卿相・文人らが会しての催しであった。麗藻詩人としては、大江以言・具平親王に次ぐ入集をみる伊周の、この日の作と共に輔尹の詩が採られたのである。

前帥伊周は今月(寛弘二年三月)二十六日^⑧、配流の地から召換後初めて昇殿を聴されたばかりであった。この日の作の講詩は翌四月一日に行われたが、伊周の詩について「外帥詩毎句有感、満座拭涙」「外帥詩有述懷、上下涕泣、主人(道長)感歎、有牽出物^⑨」の様であったと言う。輔尹の作は、伊周のそれには及び難いが、その感動的な詩に続いてみえる。すなわち次のごとくである。

花落春帰路

花落ち春帰る路

花落春帰共背^レ心

花落ち春の帰るは共に心に背き

更遮^二行路^一共相尋

更に行路を遮りて共に相尋ねん

風和過處多薰^レ地

風の和ぎて過る處多く地を薫らせ

鳥老去程漫謝^レ林

鳥の老て去る程漫に林を謝さす

媚景臨^レ岐残雪乱

媚景岐に臨みて残雪乱れ

芳辰按^レ轡晚霞深

芳辰轡を按えて晚霞深し

光陰苒々當頭走

光陰苒々當頭として走く

一日追歡勝^二萬金^一

一日の追歡は萬金に勝る

輔尹左少弁時代の作。同じく(下)酒部に

醉時心勝^二醒時心^一

醉し時の心醒し時の心に勝る

得^二酣字^一

酣の字を得たり

醉心已勝最^レ応^レ甘

酔える心の已に勝れるは最も応に甘たるべし

誰以^二醒時^一比^二漸酣^一

誰か醒し時を以て漸く酣なるに比せんや

与^レ彼停^レ盃思^二往事^一

彼と与に盃を停めて往事を思ふは

豈如^二添戸契^一交談^一

豈、戸を添えて交談を契るに如かんや

漢高祖樂頻欣識

漢の高祖は樂しみて頻りに欣び識り

楚屈原憂未^二酌諳^一

楚の屈原は憂うるも未だ酌み諳せず

百慮消^レ中遺^レ有^レ恨

百慮中に消えて恨み有るが遺り

老来官散淚難^レ堪

老来り官散にして涙堪え難し

と詠んでいる。詠作の時期・場については不明であるが、やはり然るべき作文会での作と思われる。

『本朝麗藻』の成立が、先学諸氏の考察により中書王具平親王が寛弘六年七月に、伊周が同七年一月に、以言が同七年七月に相次いでこの世を去ったことと無関係でなく寛弘六年七月から七年七月前後、おそらくとも八年六月以前の成立は動せないとのことであるから、少くとも輔尹も大和守に任ずる寛弘六年三月前後までの京官在職中に作られたものと推察される。特に結句の「老来官散淚難堪」と詠ずるところからは、決して若い時代の詠とはなしがたいであろう。

輔尹の現存作品は以上である。残る作品は少いが、一条朝の詩人群の一人として活躍したであろうことは次に記す資料などによっても何がしの裏付けを得ることができよう。公卿日記等に名をとどめるところ、それは当然のことながらその活躍期は京官だった少弁時代、寛弘元年より四年に集中している。同六年三月には大和守となり、京を離れたからである。その間の参加詩宴、詩会、また名はとどめないが参加の可能性の大きいものを列挙してみよう。併せて年表を御覧頂ければ

文中の「木幡願文」とは、『本朝文粹』卷十三に所収される「為左大臣供養淨妙寺願文」のことであり、匡衡が輔尹の示唆をえて記したという、その部分は今「青苔鋪設。自展二七淨瑠璃之茵。紅葉乱飛。暗成二千花錦繡之帳。」の本文で伝っている。寛弘二年十月十九日付の願文である。なお、「頭輔尹」とあるのは、輔尹の極官名「木工頭」によって匡房の記しとどめたものであろう。寛弘二年十月当時、輔尹は左少弁として着実な活躍期を迎えていた。

余談ながら匡衡との関係で思い合せられるのは「赤染衛門集」にみえる「三河のかみすけただくだる道にてしばしゐてわかき人のかたにあふぎおこせて」の詞書による贈答歌のあることである。「三河守すけただ」が輔尹である確証は今のところ得られていないが、その可能性を認めるとして、匡衡を介しての赤染との交流もうなずけるところである。しかし輔尹の三河守就任の時期について水野氏は、伊賀守となる以前、長徳元年から三年までのころと見ておられるが、長徳二年正月廿五日には孝直が三河守に任ぜられている（長徳二年大間書）ので、その想定には少々無理があるうかと思われる。

以上、輔尹が、孝直と「一雙の者」と評され、また為憲や為時・孝道・敦信・孝直らと並んで「越二於凡位一者」と記された評価を支えるいくらかの傍証を求めて、周辺の考察を試みた次第である。

重複の嫌いを免れないが『古本系江談抄注解』の余言には、前述「故共貧甘」に言及して、この項に挙げられた六人について「彼らがすぐれているから貧しいというのは、当時の時代相に対する皮肉であろうか。それにしても輔尹孝直が一雙の者と言われたにしては、残る作品が少い。あるいは学芸のことに限定しないで言われているのかも知れない」と述べておられることを付加しておきたい。猶この六人についてはいづれも年令不明であるが岡田希雄氏の「源為憲伝攷」（『国語と国文学』第十九卷一号）によれば、為憲はその歿年の寛弘八年には七十七才

ほどではなかったかとの推定が下されている。輔尹たちよりはやや年長と思し、為憲を除く他の四人、とりわけ一雙のものとされる孝直と輔尹は同年輩であつたろうと推定される。

次に輔尹の現存詩文について見よう。前にもふれたごとく『本朝麗藻』に二首、『和漢兼作集』に一句がみえる。詠作順にみれば

水清似晴漢 水の清きこと晴漢に似たり

煙消更瀉九霄月 煙消えて更に瀉す九霄の月を

風洗還摸七夕秋 風洗みて還^{また}摸^うす七夕の秋を

の『和漢兼作集』所収の句が最も早いものである。すなわち寛弘元年九月十二日、道長第で催された作文会での作であつて、この日の作文について

十二日癸巳 天晴 馬場殿上人会合。有作文事。水清似晴漢。以秋為韻。上達部五六人、殿上人、儒者、經文章生者廿許。未時事始、子丑時許事了。

と『御堂関白記』に、また『権記』には

（略）又此殿有作文。積善序者也。題者以言。水清似清漢。秋字。余為忌日不作文。而依有命直候也。

と記されそのあらましを知り得る。二十数名の詩文に堪能な人々が道長邸に集うての、かなり大がかりな作文であつた様子である。『類聚句題抄』には、この日座を連ねた顕光・公任・以言・道濟・慶滋為政・高皆積善・有国・孝道・菅原宣義・斉信ら、錚々たる面々の句がみえる。輔尹は、この年六月十七日の小除目（^{日本}略）で、左少弁致書の辞任にともない右少弁から左少弁に遷つたばかりのことであつた（『弁官補任』に左に転じた旨のみで日付の記載は無いが、六月十七日に広業が右少弁に任じていることから推定）。

輔尹の他の二首は、一条朝詩壇を代表する詩人群の作品を集成した、

大江匡房の著した『江談抄』に「輔尹・孝直一雙者也」として次の一文がある。

又被^レ命云。輔尹・孝直一雙者也。匡衡送^二書於行成大納言許^一云。為^レ憲・為^レ時・孝道・敦信・孝直・輔尹。此六人者、越^二於凡位^一者也。故共甘^レ貧云々。

（群書類従本『江談抄』に拠る。
傍点筆者、以下同）

と。「輔尹・孝直一雙者也」とは、二人が並びすぐれた者であるとの意であらうか。源為憲・藤為時・源孝道らは『本朝麗藻』『類聚句題抄』などに多くの作品を残し、『続本朝往生伝』一条帝の項において、当代の「天下の一物」とうたわれた文士たちである。「此六人者、越^二於凡位^一者也」とは、輔尹・孝直もこれらの人々に伍して学問・人品にすぐれた存在であるとの賞讃を意味するものであらう。従って「故共甘^レ貧」と「当代の時代相に対する皮肉^①」をもって言ったものと解される。しかし、現実には為憲や為時らに比肩されるにしては、輔尹も孝直も現存する詩文が少いのであるが、当代の碩学匡衡をしてかく言わしめたからには故なきに非ずと考え、その裏付けの一端について考えてみた。先ず孝直についてみよう。

孝直の詩で現在見られるものは『類聚句題抄』に「絃歌伴月来」題の一句のみである。しかし、それは作詩年代不明ながら右金吾齊信・江以言・源為憲・源孝道・善為政・菅宣義・藤為時らと同じ筵に連なっている作であることが、同じく『句題抄』に残る同題の詩により明らかである。然るべき詩会での作であることは言をまたない。

また源為憲が頼通のために著したと云われる『世俗諺文』の、寛弘

四年八月十七日付の序文には孝直にかかわる次の一文が記されている。その部分を抜いてみよう。

去夏。古僕為憲賜^ル参州前刺史藤孝直撰集我朝古来七言詩秀句一卷。命曰。可^ヘ加^ニ遺漏^一矣。僕避^レ席揖^ニ曰。孝直本孔門之藤雄^ニ己^一其人也。假令新撰^二他文^一。難^シ下^ニ雌黃^一矣。

（「観智院本『世俗諺文』本文（第二版）
と出典」山根対助監修リラの会による訓）

というのである。まず孝直の撰する我朝古来七言詩秀句一卷の存したことが解されると共に、先学の為憲が「可加遺漏」の命に対して「避席揖」して、「孝直は藤氏における儒門の雄、その人である。その孝直の撰びに對し、たとえ新しい他文を撰び出したとしても、その上に雌黄を塗って書き改めることは出来かねる」と答えたとの意と解される。孝直の学問の人としての客観的評価の遺憾なく表現された一文と見る事ができよう。これによって当代における位置付けが推察される。

孝直と「一雙の者」と言われた輔尹の詩文も今は僅かに一句二首を見るにすぎない。が、しかし、詩文の人としての評価の一端をしのばせるものとして、古本系江談抄の醍醐寺本『水言抄』にみえる次の話を挙げる事ができよう。匡衡にかかわる話である。全文をあげる。

又被^レ命云。匡衡木幡願文作^レ之。持^二願文^一示^二頭輔尹^一云。閣下旧人也。可^レ有^二一言之潤色^一。輔尹吉見了云。一篇甚神妙也。但可^レ献^二狂言^一。處^レ譽之句哉可^レ待幾。匡衡即執^レ筆加^二一句^一。青苔猶滑。自展^二七浄瑠璃之茵^一。紅葉漸飄。暗飭^二千華錦繡之帳^一。輔尹又云。甚優美也。但可^レ献^二狂言^一。七浄瑠璃。其義如何。答云。瑠璃者七度瑩之後浄。故曰^二七浄瑠璃^一。

（「古本系江談抄注解」による）

この項は古本系江談抄のみにあって、類従本系では見おとされたものらしいが、匡衡と輔尹の旧来の交友関係を伝えるものであり、輔尹の文章への造詣の深さをもものがたる示唆に富んだ一資料といえよう。

